

デジタル・アーカイブ学会ワークショップ

民族誌映像をどう活用するのか？

2020年10月17日

南山大学人文学部人類文化学科

黒澤 浩

1. 南山大学人類学博物館

- 
- 1949年4月1日 南山大学は戦後の新制大学としてスタート
 - 1949年9月1日 「南山大学付属人類学民族学研究所」設立
 - 1964年 南山大学、現在の山里町に移転
 - 1966年 博物館相当施設の登録申請、翌年認可
 - 1978年 制度改革により、研究所と博物館を分離
 - 1979年 南山大学人類学博物館に名称変更
 - 2004年 人類学博物館規程の制定
 - 2013年 人類学博物館リニューアル

2. 人類学博物館のリニューアル



展示室の様子 1



展示室の様子 2

3、タイ北部山地民資料の展示

タイ北部山地民資料の展示



上智大学 タイ山地民の民族誌資料



リス族の女性用上衣



ミエン族司祭者の衣装

評皇券牒—世界最大のパスポート

- ▶ 1970年正月元旦にチェンライ州チェンカム県にあるマイロミエン傜村を訪ね、ついにその地で問題の評皇券牒の現物を見出し、次いで1972年、チェンライ州ガオ県の山地にあるバン・クン・ヘン傜村でその実物を入手することができた。

(白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』(p.75))

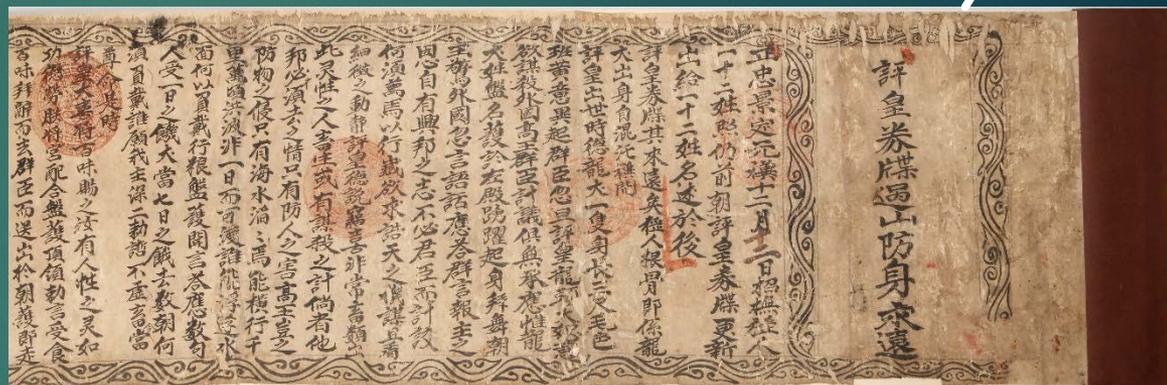


文化の共同祭典で掲げられる評皇券牒

国立歴史民俗博物館編『アジアの境界を越えて』展示図録より

人類学博物館所蔵の評皇券牒

全体（長さ6m40cm）





4、映像資料をいかに活用するか？

映像人類学 (シネ・アンソロポロジー)

▶ 映像人類学

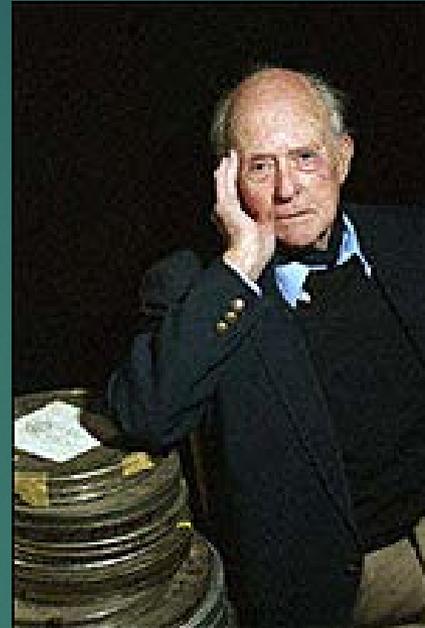
民族誌映像の制作

フランスのジャン・ルーシュによって
確立された

▶ キーワードは「共有」

共有の3段階

1. 映像制作の段階で、現地の人たちにかかわってもらうこと
2. その映像を現地の人にアクセスしやすい状態にすること
3. その映像をアーカイブとして活用し、自分たちの未来を想像/創造すること



ジャン・ルーシュ



代表作の一つ『人間ピラミッド』

- 
- ▶ 映像制作に現地の人々の参画を求めるのは無理。
 - ・ この映像が撮られた時代には映像人類学の方法がまだ明確になっていなかったこと。
 - ・ 現在のタイ北部にすむ様々な民族集団は、上智大学が調査した当時の生活様式をほぼ喪失したものと見られること。
 - ▶ そうした彼/彼女らにこの映像を提示することで、過去の生活を思い出してもらうことはできるかもしれない（映像に映っている本人とか、あるいはその子供や孫）。
 - ▶ しかし、それ以上に大事なのは、この映像によって民族集団あるいは家族の記憶を紡ぐこと、そしてそれが自分たちの未来への選択肢として資源化していくことではないか。

西北タイ歴史・文化調査団蒐集8mm動的映像の「再資料化」と動的映像資料活用法の研究 —その意義と課題—

- ▶ 民族誌展示（＝異文化展示）
当該文化の担い手の参加が不可欠
↓
しかし、そんな資金や人的つながりが
ない場合どうするか？
- ▶ 人類学博物館では、コレクションを
調査成果と位置付け、フィールド
ワークの成果展示として展示を構成
した



映像の評価と課題

- ▶ 映像についても同じことがいえるのではないか？
- ▶ 調査者・撮影者が語ることで、研究という立場からの切り取りとなる。それは撮影に対する姿勢を明示することにつながる。
- ▶ しかし、一方で、今回の試みが調査の経緯を示すものか、新たな民族誌への方向付けになるかは未知数

民族誌的現在を中和する

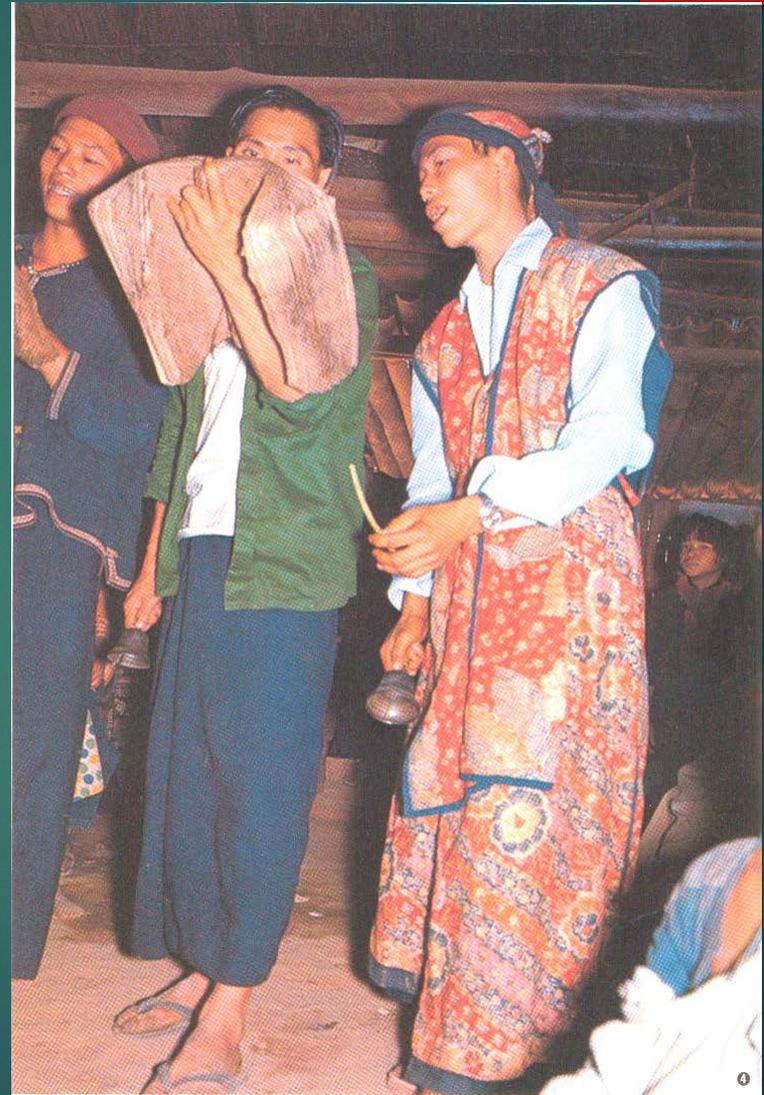


- ▶ 映像は非常に強力なメディアであると同時に、そこに映されていることがすべてだと受け取られかねないメディアでもある。
- ▶ 博物館における民族誌展示にも同じ問題があり、対象となる現地の人々の生活が、外部から相対的に孤立していて、そのために昔ながらの生活を送っているというイメージを創りやすい。
- ▶ これは「民族誌的現在」と呼ばれ、調査地域の歴史を排除した見方になる。
- ▶ それを避けるために、人類学博物館では、展示の中に写真を何枚か入れた。こうした写真を示すことで、民族誌的現在の毒を中和しようとした。

民族誌的現在を中和する



展示室に写真を配置



司祭者の腕時計に注目



足元は革靴

博物館における映像活用の課題

- ▶ 現行の博物館法には博物館が収集・保管する資料として「フィルム」が含まれているが、現在の学芸員養成課程のカリキュラムではフィルムを扱うスキルの習得はできない（視聴覚メディア論の中で行っている可能性はあるが...）。
- ▶ MLA（最近ではLAM）連携に対する期待は大きいですが、実際には現実味がなく、悲観的。